石垣市における障害児のための心理リハビリテイション（動作法）キャンプの経緯 大学人の地域貢献の一つのあり方

Hoshino　Kimio
星　野　公　夫

要旨

キーワード　心理リハビリテイション（動作法）　障害児、キャンプ、石垣市

障害児の発達促進を図る方法として、心理リハビリテイション（動作法）は有益なものである。そのため、全国各地で動作法キャンプがもたれている。そこで、本論では、比較的後発である石垣市のキャンプの発足から現在に至る経緯を検討した。また、それらの活動に関する研究者の関与の仕方についても検討した。その結果、トレーナー養成、キャンプ実施のための費用等に改善すべき点はあるものの、保護者や関係者の意欲がキャンプを継続させ、障害児の発達促進に有益なことが理解された。

トレイナーに対する大学研究者による心理リハビリテイションの理論や実技の研修は必須であり、この点に関してはこの活動に関係している研究者はその役割を十分果たしていると考えられる。今後は、大学当局による研究者の活動のバックアップ体制の確立が要請される。

１　はじめに

現在、脳性まひ児や種々の情緒障害児に対する発達促進のための関わりは、主として、病院や学校等でなされているが、その関わり方は質量共に十分とは言えない。そのために、障害児の発達促進の場を求める保護者の願望は切なるものがある。

この問題を解決する一つとして、保護者が中心となり、その地域に、障害児の発達の促進を図るグループを結成し、それが障害児の発達に関わることが考えられる。本来なら、これらの仕事は公的に行われることがもっとも望ましいのであるが、現実には、公的機関による関与が質、量共に不足しているので、保護者を中心とした活動が重要な意味を持つことになる。

また、この活動を実施するに際し、近年盛んに叫ばれている大学の地域貢献の一環として、大学において障害児の諸問題に関わる研究者がこれらのグループの活動に関与するなら、研究者の専門性が地域に密着した実学として生かされると考えられる。

筆者は、石垣市において、2001年より、保護者と養護学校の教師の協力の下に結成され

た心理リハビリテイションを中核とした障害児の発達促進を図るグループである「えいま会」の実施する訓練キャンプに参加している。特に2004年と2006年との２年間は、本学の特別研究として、訓練者（トレイナー）の養成を中心として、これらの活動に対する援助の試みをしてきたので、今回、訓練キャンプの活動の経緯を通して、地域グループの活動とそれに対する大学人の協力について検討することによって、地域における活動の活発化を図る端緒としたい。

2　心理リハビリテイションとは

心理リハビリテイションとは、1966年以来、成瀬を中心として彼の共同研究者が開発した心理療法の理論及び技法である（1995）。ここでは、当初、脳性まひ児の異常筋緊張が催眠で弛緩した事例を契機として、脳性まひ児の動作の不自由を、従来の生理学の観点に基づく医学による治療ではなく、自分の身体運動の自己制御という心理学の立場から考察し、不自由の改善を図ろうとしたものである。不自由の改善は、身体各部の弛緩とか、腕上げ、重心移動等の動作課題を設定し、この課題の解決を通してなされると見ている。この時点では、本法は脳性まひ児の動作の改善を中心としていたために、動作訓練とも呼ばれていた。

その後、大野、今野（1978）が自閉・多動児に動作訓練を実施し、自閉行動に変容を示す事例を得た。この事例は心理リハビリテイションの理論の展開や訓練対象の拡大に大きな転機をもたらすものであった。なぜなら、自閉児の行動に変容が見られたことは、動作課題の解決を通して心理的な変容がもたらされると考えられるからである。

この後、動作訓練によって心理的変容がもたらされるとの推測は各方面から検討され、自閉児や多動児等の障害児の行動変容は勿論のこと、精神分裂病患者（1982）、高齢者の心理的変容（1986）のみならず、スポーツ選手の心身の変容（1996）（2003）等様々な対象において心理的変容がもたらされることが認められた。これに基づき、心理リハビリテイションは、動作訓練という呼び名から、動作法または臨床動作法と名乗るようになった。

現在では、心理リハビリテイションは開発当初の目的であった動作の改善は当然として、そのほか心理療法の対象となるすべての心理的問題に関わることができる。しかも、脳性まひ児や、自閉、多動児への関わりを出発としているだけに、言語によるコミュニケイションが不可能な対象に対しても関与できるために、心理リハビリテイションは、従来の言語を主とする心理療法では関わることの難しい対象に対しても関わることのできることが特色となっている。

2　石垣市における心理リハビリテイションキャンプの発足

1）　心理リハビリテイションキャンプ

心理リハビリテイションでは、脳性まひ児や自閉・多動等を主とする情緒障害児に対する関わり方の一つとして、1967年以来、一週間を中心とした集団宿泊訓練キャンプが行われてきた。動作法は脳性まひ児の動作の改善過程を動作の学習と見るので、スポーツにおける

合宿訓練に代表されるように、動作の学習には集中訓練が大きな効果をもたらすと予測されたからである。

この訓練キャンプが開始された当時は、脳性まひ児の療育施設は現在よりも遙かに少なく、十分な療育を受けられない子供たちが多数存在していたために、このキャンプはそれらの子供たちにとって大きな助けとなっていた。このため、福岡で年２又は３回行われるキャンプには全国各地から子供たちが参加していた。そして、このキャンプで成果を得た子供たちや保護者が地域に戻り、各地域でのキャンプ実施の原動力となっていった例が多かった。

キャンプ期間は試行錯誤の末、相当の間、６泊７日で行われてきたが、訓練方法の開発により、現在では５泊６日で行われるようになってきた。

1967年に福岡で第一回のキャンプが行われ、その成果が大きかったために、これを契機としてこのキャンプは、次第に全国各地で行われるようになって行った。現在では、キャンプは、北は北海道から南は沖縄まで、また、イラン、インド、韓国、カンボジア、タイ、マレーシア等外国まで含めると、60カ所近くで開催されるまでになっている。

２） キャンプスケジュール

石垣市におけるキャンプスケジュールを図１に示す。

キャンプの目的は、障害児に対して動作課題の解決を通した行動の改善を図ることが主目的となる。しかし、それのみでなく、心理的ストレスからの解放、自律性の獲得、主体性の獲得等も障害児の発達促進にとって必須であるので、それらを目的とした集団療法の時間がある。訓練者（トレイナー）に対しては、動作法に関する理論の学習や基本的技能の習得を図ることを目的とした研修がある。また、心理臨床として、子供の見方や関わり方の事実に即した検討を目的として、班別及び全体のミーティングも設けられている。母親に対しても、自分の子供の状態の適切な見方の学習や基本的関わり方の学習を目的とした母親研修がもうけられている。なお、この時間は、種々の学習のみでなく、先輩の母親の子育ての苦労話が若い母親にとって有益であるばかりでなく、このような子供を抱えているのは自分一人だけではないと感ずることで、孤独感の解消にも役立っている。

このような種々の目的を含むキャンプスケジュールは一見きわめて過酷に見える。しかし、これには、障害児に対して時間を守ることによる生活習慣の確立を図るとともに、一週間のキャンプを通して、目的達成のために意識・注意を集中するには、スケジュールに基づいた時間に拘束された生活がより適切なことがある。

このように、キャンプスケジュールは、トレイニーのみでなく、トレイナーや保護者も一体となって、相互に影響し合いながら子供の行動改善に関わることを中心課題として計画されている。

表 1.　研修会スケジュール

	1日目 8月1日 （火）	2日目 2日 （水）	3日目 3日 （木）	4日目 4日 （金）	5日目 5日 （土）	6日目 6日 （日）	備　考
7：00		起床・清掃・朝の集い					8/2(水) ↓ 9：00 保護者清掃
8：00		朝　食					
9：00		動作訓練					
10：00	受付準備	研修④	研修⑤	研修⑥	研修⑦		10：00
10：30	受付開始	トレーナー・保護者の会研修				保護者指導 親子訓練 効果測定	10：15
11：30		トレーナーは集団保育					11：00
	開会式 入所式	動作訓練				記録整理	
12：30	昼　食	昼　食				閉会式 退所式	12：00 12：30
13：30	研修① 研修②	お昼寝			SVとの班別タイム		
14：30 14：40	研修③ インテーク 測定面接	集団療法（トレーナー・トレーニー） 旗制作　室内運動会　夜店準備　記念品製作				※初日は10：30より受付開始11：20までには受付をすませておく	
15：30		保護者の会研修（14：30～15：30） 研修Ⅰ　研修Ⅱ　研修Ⅲ					
16：00	動作訓練						
17：00	入浴・自由時間・SVミーティング						
18：00	夕　食				班別・全体ミーティング		
19：00	係別ミーティング			夜店祭り	懇親会・夕食		
20：00	班別ミーティング						
21：00	全体ミーティング						
22：00	就　寝						

3）石垣市における心理リハビリテイションキャンプの発足

キャンプに関する大きな流れの中で、本論では、現在6回のキャンプを行っている石垣市における心理リハビリテイションキャンプの開始からの経緯とそれに対する大学人の地域貢献のあり方について検討することにした。

2000年に那覇で行われた沖縄キャンプに参加した石垣市の発達障害のトレイニー（被訓練者）が、参加前は車イス使用であったものが、訓練後は徒歩で帰宅できるまでに障害が改善されるという事例が見られた。この著効に八重山養護学校の保護者が驚き、石垣市でも是非キャンプを開きたいという願いを持った。

一方、養護学校では、「養護・訓練」が「自立活動」と名称が変更されたのにともない、校務分掌で養護・訓練担当が廃止され、すべての教員が自立活動を担当することになった。自立活動とは特殊教育諸学校に開設されている教育課程編成上の一領域で、「個々の児童または生徒の自立を目指し、障碍に基づく種々の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識・技能・態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う」ことを目標としており、具体的には、心身の健康、知覚・認知、身体運動、コミュニケイション等の能力の改善を目的としている。これらの目的の達成には特別な知識が必要であるとの考えから、自立活動を専門家が指導している学校がある一方、自立活動は教育活動であるとの観点から、この指導を専門家にゆだねるのではなく、全教員が行う学校もある。

当時、八重山養護学校では１/4の児童生徒が脳性まひ児であった。それにもかかわらず、当時の教員で脳性まひ児の訓練に携われるものはほとんどいなかった。そこで、教員が1/4もいる児童生徒に関われないのは問題であるとの認識が持たれ、全教員が脳性まひ児に関われるよう研修を行うことにした。

この際に、どのような理論や技法に基づいて児童生徒に関わるかは教員にとって重要な課題となる。ここで、脳性まひ児への対応を、治療としてではなく、課題解決学習と見なす動作法が教育の理論として受け入れやすかったことに加え、前述の、沖縄キャンプにおける自校生徒の著効例もあったために、教員の取るべきものとして動作法が採用された。

このような状況下で、保護者の願いと教員の関心とが合致したために、石垣市において心理リハビリテイションキャンプを実施しようとする機運が盛り上がった。

４）　キャンプ発足に向けての問題点

キャンプに関するノウハウは全く無かったために、すでに21回のキャンプを行っていた沖縄キャンプ関係者からキャンプ発足に向けての資料を得た。

沖縄キャンプは、1976年12月に那覇養護学校が主体となり石川少年自然の家で実施して以来、紆余曲折はあったものの現在までに27回のキャンプを実施している。ちなみに、筆者はこの第一回キャンプにスーパーバイザーとして参加している。

キャンプ実施でまず問題となるのは資金である。沖縄キャンプからはキャンプを一度実施するのに少なくとも70万円から80万円は必要であるとの情報を得ていたが、これだけの金額を得る見込みは全く無かった。

しかし、この時のキャンプ実施検討の中核であった保護者側の宇根則光と学校側の宮城茂等は、まず、キャンプを実施し、次年度以降については、第一回のキャンプの結果に基づいて判断することとして、キャンプ実施に向けて活動を開始した。

キャンプのための基本的資金は全く不足していたために、宿泊に費用のかかる場所ではキャンプの実施ができないため、宿泊費が無料の少年自然の家を利用してキャンプを行うことにした。また、保護者は種々の物品販売を行うことによって資金を調達した。
このような経緯の下に、2001年の夏休みに第一回「えいま」キャンプが実施された。以後毎年夏休み期間中に訓練キャンプが持たれている。

3　キャンプ展開の経緯

1）　キャンプの状況

表 2.　キャンプ参加者数

		1回	2回	3回	4回	5回	6回
トレーニー		12	12		9	12	10
SV		2	2		2	2	2
トレーナー	養護学校	6	8		5	4	4
	施　設	2				3	1
	大学院生等	3				2	2
	他	1	4		4	3	3
サブトレーナー	養護学校	5	8		11	10	8
	施　設	1	1		4	1	1
	大学院生等						1
	他	1					
マネージャー サブマネージャー		養	3養		3養2他1	養2	養3
ボランティア			6			7	6
保　育		2	2	高校生ボランティア			

第3回キャンプの資料が欠落しているのが残念であるが、表2に見られるごとく、トレイニーは10名前後である。

トレイナー（訓練者）については、最初に比べ、石垣養護学校の教員がやや減少している。それに対して、サブトレイナーに養護学校の教員が多くなっている。このことは、他地域との交流を目指し、意識的に他地域からトレイナーを採用していることと、近年、夏期休業中に教員に対する研修が増えたために、6日間連続したキャンプへの参加が難しくなった事情もある。

地域の他の施設からのトレイナーの参加は多いとは言えない。ただ、ボランティアとしての参加者が6名前後いるので、ここからトレイナーへの参加が増加することが期待される。しかし、この点は今後の課題である。

保育に関しては、第一回キャンプでは、キャンプスタッフから担当者を当てたが、第三回以降は高校生がボランティアとして保育に参加するようになっている。

2）保護者の活動

第一回以来、キャンプにおけるトレイナーの行動変容が認められて来たため、動作法に対する要望は強く、保護者のまとまりは大変に良い。しかも、トップは固定されたものではなく、会長は任期を２年と定め交代している。これは一見連続性に欠けるようにも見えるが、地域が狭いこともあり、会長を退いてもグループから退くことはなく、キャンプに関する活動は続けている。そのために、一度会長を経験した保護者は経験前と比較すると、活動への関与の仕方とか責任感がそれまで以上に高まるために、活動が全体的により活性化するする傾向が見られる。

3）公的機関との関与

2003年度から、沖縄県の地域療育等支援事業コーディネイターがこの活動に着目し、年に３－４回実施しているキャンプのフォローアップの会は療育活動に値すると評価した。その結果、2004年度から３年間、フォローアップの会に助成金が下りた。これは今年度でひとまず終了するが、公的機関との連携は沖縄本島キャンプではまだ得られていないものであり、今後のキャンプ運営に何らかの好影響があると思われる。

4）資金に関する問題

発足当初は、保護者によるさまざまの物品販売のみで運営資金を調達していたが、2004年度から共同募金からの助成金が得られるようになった。額の多少は別として、キャンプ運営には大きな援助となっている。

5）キャンプに対する親の期待

石垣市のトレイニーのほとんどは自閉児や多動児等の情緒障害児である。この子供たちは他者との関係を保ちながら落ち着いた生活を送ることが極めて困難である。したがって、集団生活を送ることはほとんど不可能と言ってよい。例えば、あるトレイニーは一箇所に５分間座っていることができず、すぐの飛び出してしまう。呼び戻そうとしても全く我関せずである。

集団生活に困難があると、学校を卒業後、作業所等に入所することは極めて難かしい。そのために、自分の子供が集団生活を送れるようになることが親の基本的な望みとなっている。

動作法では、このような自閉や多動の子供たちが他人との関係を築くのに効果的であり、６回のキャンプを通して、子供たちは大きな変化を見せている。保護者は子供たちの変化を実感しているだけに、このキャンプ実施への意欲が極めて高い。

なお、石垣市の活動では、集中訓練に加えて、キャンプのフォローとトレイナーの研修とを目的として、一年間に３または４回の一日訓練会を行っている。

4　今後の課題

1）指導者について

石垣島の訓練キャンプでは、開始以来、沖縄国際大学と琉球大学から教員がスーパーバイザー(SV)として参加してきた。現在の状態から見て、メンバーの入れ替わりはあるものの、両大学から教員がSVとして参加できる可能性は高い。しかし、地域に根付いたキャンプと言う観点からすると、地域内のメンバーがSV資格を獲得することがより望ましい。

ただし、大学の教員がSVとして参加はできるものの、交通費や宿泊費の実費は必要となる。キャンプ活動に関わる費用の中で、SVに要する費用は相当の割合になる。

ただ、2002年度からは琉球大学ではこの活動を大学の地域貢献事業の一環として位置づけ、研究重点化経費を配分するようになっている(2004)。本学でも、2004年度と2006年度には、特別研究として取り上げられたために予算の配分が受けられ、地域の負担はなかった。

大学の地域への貢献に関して、離島の多い沖縄県に存在する本学は、離島に関わる具体的活動に関する対策を実現することが課題となろう。

2）トレイナー

表２に見られるごとく、トレイナーやサブトレイナーの中心は養護学校の教員であり、しかも熱心である。教員が中心であることは、石垣市のような小規模の地域では、保護者の信頼を得るのに極めて有益である。しかし、石垣市は離島のために、教員は３年を目途として本島に転勤する例がほとんどである。このことは、ベテランのトレイナーの育つ確率が低く、訓練の質が高まりにくいという問題が生ずる。

この問題の解決のためには、教員のみでなく、地域の施設の職員がより多くキャンプに参加し、訓練能力を高めることが望ましい。表に見られるごとく、施設職員の参加者は確実に増えているとはいえない。しかし、年度ごとにばらつきはあっても、確実な参加があるので、回数を重ねるにつれて能力のあるメンバーが増えると思われる。

近年、夏期休業中に教員の資質の向上を目的とした研修会が行われるようになってきている。主旨は良いのであるが、研修会に出席するために、教員が連続6日間のキャンプに参加することが難しい事態も生じている。しかし、本キャンプでの活動は極めて現実的で、しかも、子供の見方や関わり方を事例を通して具体的に学習するよう計画されている。したがって、ここで行われる障害児との関わり方の理論と技法は、学校現場における児童・生徒の指導にとって極めて有益なものである。それ故、行政当局は本訓練キャンプを教員研修として適したものと認め、本キャンプへの参加を当局主催の研修と同等と見なすなら、教員の参加がより可能となると思われる。

3）保護者の活動

前述のごとく、保護者の活動は意欲的である。ただ、キャンプでは、スケジュールにトレイニーと保護者は全て出席することが条件となっている。ところが、夫婦共に働くケースの

多い石垣市では、6日間全てに保護者が出席できないために、キャンプに参加できないケースもある。

この点に関しては、保護者側の問題としてだけ捉えるのではなく、キャンプの条件を決定している心理リハビリテイション資格認定委員会に、条件の緩和を要望する必要があろう。

4）その他

キャンプ運営には多額の費用を必要とする。したがって、現在、共同募金からの助成を受けているが、市等の公的機関からの助成をうるような努力が今後必要である。

追記

本研究は沖縄国際大学特別研究費に基づく研究である。

謝辞

本研究を行うに当たり、キャンプの運営にあたる多くの方々、さまざまな資料を提供された方々、特に、キャンプに参加したトレイニーの皆さんに深く感謝いたします。

引用文献

星野公夫　1996　スポーツへの動作法の適用、発達臨床心理研究、第１巻、175—179

星野公夫　2003　「スポーツ選手のための動作法」、高文堂出版社

井村　修、古川　卓　2004　沖縄県における心理リハビリテーションの展開　琉球大学学による地域貢献の一つのあり方—、　琉球大学法文学部人間科学科紀要　人間科学、13号、157—177

今野義孝　1978　多動児の行動変容における腕上げ動作コントロール法の試み　ー行動変容における弛緩訓練の効果についてー、東京教育大学教育学部紀要、24巻　187—195

中島健一　1986　(痴呆)緘黙老人—身体のかんじを”味あう“、動作療法（障害児臨床シンポジアム第１巻

The process of Psychological Rehabilitation(DOUSA—HOU) camp in Ishigaki-shi —the roll of researchers in university for the community service

Hoshino Kimio

ABSTRUCT

Key words : psychological rehabilitation(DOUSA-HOU) 、 handicapped children 、 camp, ishigaki-shi

Psychological rehabilitation(DOUSA-HOU) is useful method for accelerating the development of handicapped children. Therefore DOUSA-HOU camp has been practiced in many places in Japan. So , the process of DOUSA-HOU camp in ishigaki-shi from start to now was discussed in this paper. Also the role of university researchers in this camp was discussed. In conclusion, desires for practicing the DOUSA-HOU camp of parents and teachers has continued DOUSA-HOU camp. And handicapped children has developed their behaviors through the camp. Researchers has executed their roll to teach the theory and the method of DOUSA-HOU to trainers. The back up systems for the activities of researchers in the field have to build up by the authorities of the university in future.